

住民の手で“地域医療”を守ってみせる!

「NPO法人 地域医療を育てる会」(千葉)の活動レポート

その3 『レジデント研修』で住民と研修医がコミュニケーション

ノンフィクション作家 柳原 三佳



2005年に千葉で生まれた「NPO法人 地域医療を育てる会」のシンボルマーク。「医療」「住民」「行政」「福祉」、これら4つの“ハート”が、4つ葉のクローバーのよようにひとつになってほしい……、そんな願いを込めて作られました。

1月24日、各新聞の朝刊(千葉版)に、こんな記事が掲載されました。
 ■「手術のガーゼ体内残留」 大網白里の女性、県相手に提訴 千葉
 県立東金病院で卵巣腫瘍(しゅよう)摘出手術を受け、体内にガーゼが残されていたなどとして、大網白里町の女性ジャーナリストが県を相手取り、損害賠償を求める訴訟を千葉地裁に起こしていたことが23日、わかった。

提訴は今日6日付。訴状などによると、女性は1995年10月25日に東金病院で卵巣腫瘍の摘出手術を受けたが、腹痛などがあり、2005

年5月に東金病院でレントゲン検査したところ、ソフトボール大に膨らんだガーゼの体内残留がわかった。東京都内の病院で開腹手術し、除去した。(2009年1月24日「読売新聞」)

実は……、この裁判の原告、つまりガーゼ残留の被害者は、この原稿を書いている私、です。

本連載の一回目で、実父が医療過誤で亡くなり、民事裁判で逆転勝訴した経験があることを書きましたが、何を隠そう、私自身も「ガーゼ残留」という医療過誤の被害を受けた当事者だったのです。

私の場合は、お腹の中に10年間もガーゼを残されていたわけですが、最後の3年間くらいは、腹痛や体調不良が顕著になり、たびたび東金病院で受診していました。胃カメラやエコーなど、いろいろな検査をしたものの、結局原因は分からず、最後は救急外来で撮ったレントゲンが決め手となって、ようやくガーゼが残されていたことが発覚したのです。

ガーゼを埋め込まれ、さらにその上、数回の受診時に見落とされ……。もちろん、まさかガーゼが入っているとは、お医者さんでも想像がつかなかったのだと思いますが、私の中では病院に対する不満だけでなく、全身麻酔での開腹手術をもう一度受けなければならぬという恐怖も募り、はつきり言ってガーゼが発覚した2005年当時は、怒りと不安が極致に達していました。

前の記事ではあえて触れませんでした。が、心の奥底に長年はびこっていた医療に対する不信感は、こうした体験によって増幅されたというのが正直なところです。

さて、そんな私が、なぜ今「NPO法人 地域医療を育てる会」という会に参加し、よりにもよって、ガーゼを置き忘れた東金病院のサポート活動をしているのか……。

そこには、自分でも不思議なくらいの心の変化がありました。現在は、少しでも地域医療を活性化させたい、そして、私のような思いをする被害者を減らしたい……。そんな思いで、

活動に参加しています。

この「心の変化」については、またの機会に分析するとし、今回は、地域医療を育てる会が毎月開催している、住民参加による「レジデント研修」についてレポートしてみたいと思います。

コミュニケーション スキルの重要性

私が「NPO法人地域医療を育

てる会」に入会したのは、昨年、

2008年4月のこと。そして、会

員になって、なにもわからないまま

初めて出席したのが、同年4月に行

われた「レジデント研修」でした。

「さあ、研修を始めましょう！」

と書かれた研修スケジュール。東金

病院の一室で20人弱の市民が一人の

若い研修医を囲むかたちで、それは

始まりました。

スタートから終了まで、1時間半

の流れはこんなかんじです。

5時 主催者からの挨拶（研修医の評価用紙配布）

5時15分 研修医自己紹介（ここから評価が始まります）

5時30分 質疑応答（15分）

5時45分 討議（30分）

サポーター（住民）の自己紹介（名前と、質問の答え（簡単に））

研修医の司会進行のもと、

討議

6時15分 評価用紙記入（15分）

6時30分 評価用紙回収

次回のテーマについて

解散



レジデント（ホワイトボード下）を囲んで研修スタート。NPOの藤本理事長の司会で、まずは「評価表」の確認。

あなたの素朴な疑問と率直な意見が、若手の医師を育てます！

医師育成サポーター 募集中

日ごろ、診察室では医師に遠慮して聞けないこと・病気の予防について知りたいことはありますか？

NPO法人 地域医療を育てる会では、若手医師を育てるための懇話会（研修）に参加する「医師育成サポーター」を募集中です。



千葉県立東金病院で実施します。

毎月一回（平日 夕方より）2時間程度

平成21年度から、2名の医師の研修を行うため、

医師育成サポーターのグループを「月曜日開催」と「火曜日開催」の

2つにします。

研修出席者には、健康情報満載の小冊子をプレゼント！

ご質問、「医師育成サポーター」登録ご希望の方は、

000-0000-0000 までどうぞ。

（NPO法人地域医療を育てる会 藤本 平日午前中対応）



医師育成サポーター募集のチラシ。平成21年度からは、月1回から2回に研修回数を増やす予定。

この日のテーマは「肺炎」。私たち住民は、研修医から医学的な説明を聞きながら学び、同時に、説明をする研修医の話し方ややさしさやスピード、こちらの話を聞く姿勢、アイコンタクトなどをこまかく評価していくのです。

医師を一般市民が「評価」するなんて……、それは私の意識の中には全くなかった行為だっただけに、少々気を使っただけで、この日の体験は、医療者とのコミュニケーションがいかに大切であるかを教えてくれた貴重なものとなりました。そして、ふと気づくと、目の前で



研修のテキストには毎回「ロハス・メディカル」を活用しながら議論を深めます。

「薬の加減でしょう」という一言で軽くあしらい、胃薬だけを処方してすぐに自宅へ帰したのも、別の研修医だったのです。

あのとき、父に付添って病院へ行き、そのやり取りを間近で聞いていた私の妹は、

「あのとき、お父さんは相当辛そうだったのに、お医者さんはお父さんと目も合わせず、3分診療どころか、お父さんの言葉をささげないように、1分もたないうちに診察を切り上げたのよ……」

一生懸命話をしてる若き研修医に、「頑張つて！」と応援している自分がいたのです。

実は、それまでの私は、「研修医」

「レジデント」という言葉に、異様なほどのマイナスイメージを持っていました。

というのも、私の父に過剰なステロイドを投与したのは、某県立病院の耳鼻科外来で、一人で診察を任されていた研修医だったからです。また、その数日後、父が真つ黒い「タール便」や胃の不調を訴えたとき、

「お父さんも、もっとしっかり自分の症状をお医者さんに伝えればよかったのに……」

と、素人ながらもいろいろな考えをめぐらせ、悔しい思いをしたことを覚えています。

医師と患者——、診察室という小さな空間で対面しながらも、そこには常に、目に見えない大きな溝が横たわっているような気がしてなりませんでした。

しかし、東金病院のレジデント研修に参加してからは、

父はその診察の2日後、出血性胃潰瘍で大量吐血し、緊急手術を受けましたが、結果的に多臓器不全で1カ月後に亡くなりました。後にカルテを取り寄せたとき、複数の研修医が日替わりの輪番で外来の診察に当たっていたことを知り、

「せめて経験豊富な指導医が横についていてくれれば……」

「もう少しじっくり父の訴えに耳を傾けて、内科の医師などに相談し



研修終了後、レジデントと歓談する市民サポーター。

図ってその溝を埋めることができれば、少なくとも父のような残念な結果に陥る患者を減らすことができるのではないだろうか」

そんな希望がわいてきたのです。考えてみれば、私のガーゼだって、同じだったのかもしれない。原因不明の体調不良を、患者としてもっと上手く伝えることは出来なかったのだろうか？

医師の側も、「特に異常なし」で帰す前に、もう一歩突っ込んだ検査をしてくれていれば……。

そういうえば、当時の東金病院の外来の待ち時間は異常な長さでした。私は待合室の長椅子の上で、腹痛に耐えながら朝から8時間も待たされたことがあります。

「どうして具合の悪い患者を、飲まず食わずでこんなに長時間待たせるのだらう、なんてひどい病院かしら！」

とにかく待たされている間はイライラが募り、診察室に呼ばれたときには、相当怖い顔をしていたに違いありません。



認定医試験を目前に控えたレジデントに、市民サポーターから激励の花束贈呈 & 記念撮影。

しかし、こうした活動に参加して
みて、当時の東金病院では内科の医
師が激減し、少数の医師が寝る間も
惜しんで診察に当たっていたという
事実を初めて知りました。あのと
き、少しでもそういう事情が分かっ
ていれば、お医者さんに対して、「お
疲れ様です」という一言も出たかも
しれません。しかし、病院との接点
がまったくないあの状況では、「コ

ミュニケーション」という言葉すら、
存在しえなかったのです。

ちなみに、「レジデント研修」の
概要については、NPO法人地域医
療を育てる会のホームページ上で、
次のように解説されています。

（2007年度春から、千葉県立
東金病院ではNPO法人地域医療を
育てる会との共催で「病氣予防のた
めの懇話会」を実施して
います。

これは、一般の方への
病氣予防や健康増進のため
に必要な「啓発活動」で、
東金病院ではかねてから
「巡回市民講座」を実施
し、地域の住民への情報
発信と、検診を行ってき
ました。こうした病氣予
防のための働きも、医師
の大切な働きだという位
置づけで行われています。
また、地元の人々にと
っても、具合が悪くなる
前に健康チェックが出来る

また正しい病氣予防の知識を得られ
る機会として大変喜ばれています。

しかし、時間の制約もあり、住民
が質問をしたり、意見交換をしたり
する時間が十分ではありません。

そこで「病氣予防のための懇話会
（仮題）」では、指導医同席のもと、
若手医師による健康講話を聴き、住
民が質問をしたり、お互いに意見交
換をしたりする時間を取ります。

さらには、医師の話が理解しやす
かったか、などを住民がフィードバ
ックし、若いお医者さんのコミュニ
ケーションスキルを上げるためのお
手伝いをします。

注目すべきは、この研修会で期待
される、次のような4つの効果が挙
げられていることです。

1. 医師が、一般の市民の医学的知
識や、理解度を知ることが出来る、
自分の診療場面での説明や、病氣
予防のための啓発活動に役立てる。
2. 一般市民が、医師から正しい病
氣予防や健康のための情報を得る

ことが出来、自分の健康に役立て
る。

3. 地域の中で病氣予防に対する関
心を高め、病氣の予防や早期発見
につなげる。

4. 双方方向のコミュニケーションを
とることで、医師と住民の間に良
い関係をつくることができる。

レジデント研修に参加したサポ
ーターからは、終了後、研修医の先生
に、心温まるこんなメッセージが寄
せられました。

「アイコンタクトが素敵に思いま
した。人の意見をよく聞き、自分の
ことを素直に語っていると、自分の
ことです。先生のお人柄が、ディスカ
ッションを重ねていくうちにわかり
ました。きっと素敵な、患者に信頼
される先生になられると確信しまし
た」

こうした取り組みが全国各地で広
がっていけば、地域医療はもっと元
氣になっていくような気がします。